

福島県男女共生センター広報誌

未来館 miraikan news NEWS

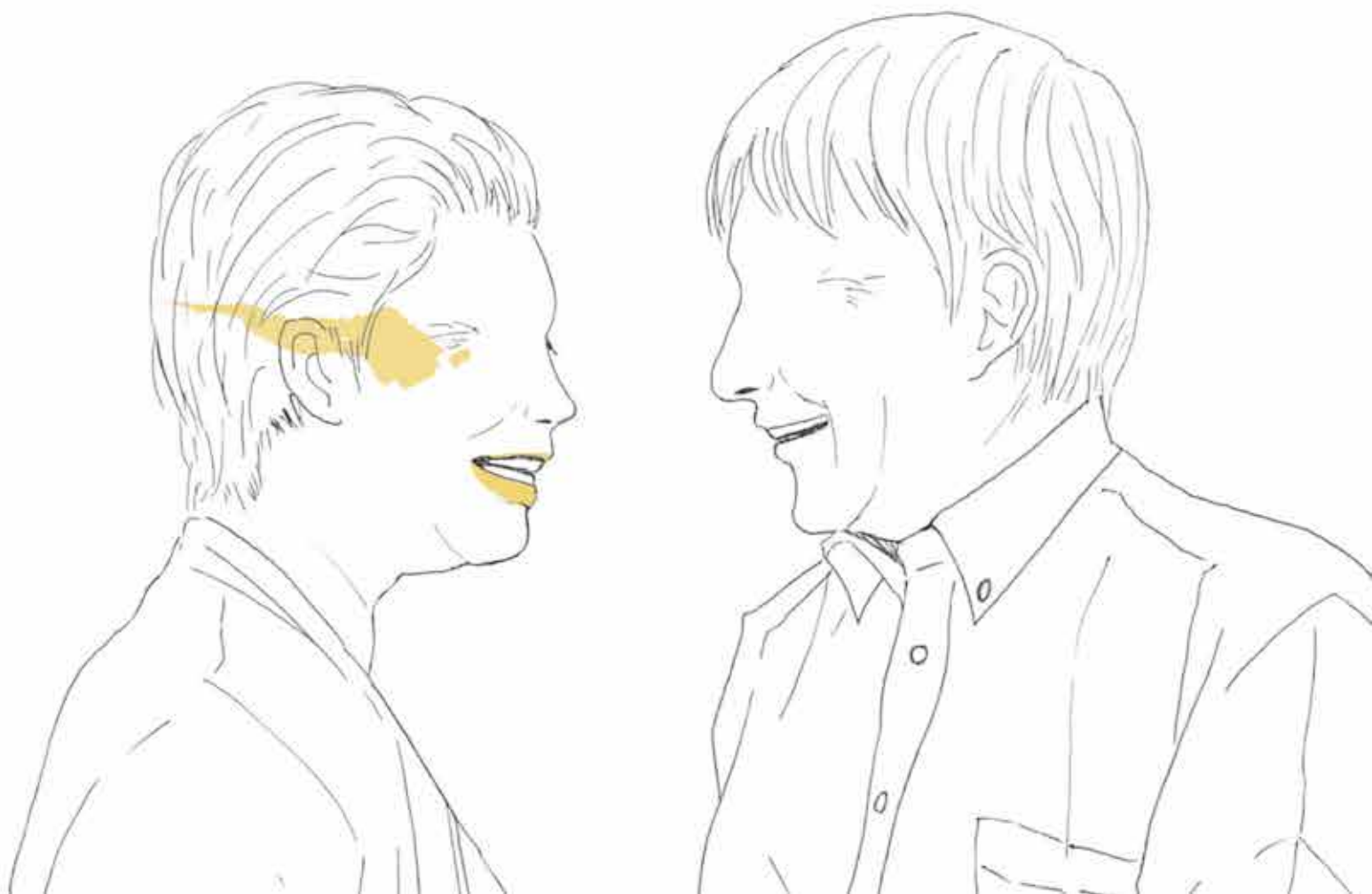
2017
vol. 62

CONTENTS

男性育児休業取得者座談会

事業レポートI・II

福島のきらめく人



育児休業取得者座談会

共働き世帯が増え、仕事も家事も育児も介護もと女性たちの負担は依然として重く、さらに平成28年4月に「女性活躍推進法」が施行され、「女性はどれだけ頑張ればいいのか」という声が聞こえてきそうです。

女性たちが職場や地域で活躍するためには、家族とりわけ夫の協力が不可欠ですが、男性の育休取得率は2.65%（平成27年度）と低く、より一層男性の家事育児への参画が必要とされています。そこで、今回は福島県内で育児休業を取得したお二人にお話を伺いました。

参加者



齋藤 貴之さん（以下：齋藤さん）

福島キヤノン株式会社勤務6年目、製造部門で交替制勤務。家族構成は妻、長女、長男の4人家族。長男の出産にあわせ、平成28年6～9月の3か月間育児休業を取得。

今回このような取材を受けるのは夢にも思わず驚いているが、これも育休を取得しないとできない貴重な体験と思っている。



猪股 淳行さん（以下：猪股さん）

国立大学法人福島大学環境放射能研究所事務室主査、17年目。現在の家族構成は妻、長男、長女、両親の6人家族。長男の出産にあわせ、平成14年8月～平成16年8月の2年間育児休業を取得。

育休を取得したのが約14年前になるため、以前に依頼を受け作成した育休中の体験談をまとめた資料を読み返し、当時を思い出しながら、お話ししたい。

渡辺 里珠さん（以下：渡辺さん）

福島大学4年生、「広報誌」をテーマとして卒論に取り組んでいて、未来館NEWS60号から取材同行や原稿作成を行っている。

加藤 忍（以下：加藤）

福島県男女共生センター職員3年目、未来館NEWSの編集委員。

武藤 朋美（以下：武藤）

福島県男女共生センター職員5年目、未来館NEWSの担当者。



育児休業（以下育休）を取得しようと思った理由

猪股さん：妻が平成14年4月から就職が決まっていたのですが、同年5月に子供が生まれることになり、妻は育休を取得できないため、私が育休を取得することにしました。妻は産後休暇明けに働き始めました。当時、私は福島大学に勤めて3年目で、国家公務員の受験科目に労働法もあったため、男性も育休を取得できると知っていたので、上司に相談しました。福島大学としては、男性初の育休取得者をぜひ実現させたいと、当時の直属の上司が大変意欲的に大学当局に働きかけてくれました。

齋藤さん：妊娠中、妻が体調を崩し私が仕事を休むことが時々あり、職場に迷惑をかけて申し訳ないと思っていました。また、



座談会の様子

出産する際も妻が入院することになりますが、実家の協力が得られず、どうしたらいいかと思っていました。そんな時に、上司から「育休を取得してはどうか」と提案していただきました。実は、男性が育休を取得できることも知らなかったので驚きました。今の状況では、仕事も家事も育児も中途半場になってしまっていて良くないなと思っていましたので、妻と相談した結果、今は家庭を中心に考えようとして育休を取得することにしました。取得したいというよりは、家庭の事情があったからでした。

私は製造部門におり交替制勤務で夜勤もあります。私が抜けた分は同僚がカバーしてくれ、育休を3か月取得させてい



齋藤さんの育休中の一瞬



猪股さんの育休中の一瞬

ただきました。会社と同僚には大変感謝しています。

育休を取得したメリット

齋藤さん：最初は不安しかありませんでしたが、育休を取得したメリットは大きかったです。

家事も育児も分担できたことで妻の負担を軽減でき、私自身が安心することができました。また、子どもたちと一緒にいる時間もたくさんあり、絆が深まりました。長女の時はまとまって休みを取ることがなく、いつの間にか大きくなったように思いましたが、今回、育休を取得したことで子どもたちの成長を感じ、自分自身も成長できたような気がしました。

仕事を続けていく中で、育休を取得することは一生に一度かもしれません。すごく貴重な時間を過ごすことができ、今後、子どもたちに「こうやって育てたんだよ」と胸を張って言えると思います。

猪股さん：子どもと一緒に過ごす時間を通して新しい視点で社会を見ることができるようになったことがメリットだと思います。なにげなく見過ごしてしまうようなことが、子育てをしていると気になることがありました。例えば、お店や公共施設のどこにオムツ交換用のベビーベッドがあるかと気になりました。今は、多目的トイレに設置してあるお店や施設が多いですが、女子トイレにしか設置していない所もあり、施設の運営側が子育てについてどう考えているかを示しているのだと思いました。

育休を取得したデメリット

齋藤さん：デメリットは金銭面の不安です。女性が育休を取得するのは一般的ですが、男性もとなると給与はできませんし、妻も休業中ですし、そうすると、今まで通りの生活ができるのか、不安を感じました。育休の期間については会社から取得できる範囲で好きにとってよいと言われましたが、3か月にしました。

それから、育休に入って2週間くらいした時に会社から切り離されたように感じたことがありました。

猪股さん：私の場合は2年間でしたので、仕事からだいぶ離

れてしまい、不安に感じましたが、これからのこの大学で仕事をしていきたいと思っておりましたので、育休を自分のキャリアの1つとして考え、デメリットとは感じていませんでした。

強いて言えば、ママ友との付き合いというか、どうコミュニケーションをとったらいいのかと悩んでいました。ですが、周囲に子育て世帯が多く、外に出ると必ず他の子どもが遊んでいて、自然と育児に関する話をするようになり、育児に対する不安も解消されました。

武藤：職場復帰に当たって大変だったことはありましたか。
齋藤さん：私は3か月でしたので、復帰に対して不安はありませんでした。育休の開始と終了時に上司との面談があり、復帰もスムーズにできましたし、同僚とも育休中連絡を取りあったり、私の家に遊びに来たりと交流はありました。

育休取得後のパートナーやお子さんとの関係

猪股さん：育休取得後も育休中に過ごした時間は終わったわけではなく、ずっと良い関係を保っていると思いますし、子育てに自信が持てるようになったと感じています。また、子どもを喜ばせるアイデアがどんどん浮かんで来て、その後もその感覚は変わらずにあると思います。

齋藤さん：わかります。一緒に過ごした時間はその時限りではないと思います。今回の育休中に料理を本格的にやりました。料理は好きなのですが、時間がとれなくて今までやっていませんでした。子どもに「おいしい」と言われると嬉しくてまた作ってあげたいと思いました。育休後も家事や育児は分担して行っています。

私の妻もそうですが、女性ってすごいなと思いました。育児をしながら家事をこなすことがこんなに大変なことだったのかと知りました。今まで休みの日には家事などを行っていましたが、お手伝いという感覚でした。ですが、育休を取得したことで家事も育児も妻と協力していかないと家族が成り立たないと思いましたが、お手伝いという感覚はなくなりました。

猪股さん：妻との関係でいうと、一人目の時に私が育休を取得して、二人目の時は妻が育休を取得したのですが、妻は子

どもの事に関して私に譲る傾向にあって、今でもエンターテインメント担当になっています。

齋藤さんがおっしゃるように、女性ってすごいですよね。母の大変さがよくわかりました。しかし、父に対してはもっと子どもと関わって欲しかったと思いました。現在は両親と同居しているので平日は主に母が家事をしています。土日は子どもたちと一緒に家事をしています。長男は14歳になりましたが、「これからの時代、家事のできる男がモテる」と言いながら、一緒に料理を作ります。また、どんなに忙しくても好きな事はできます。私は三味線を弾くのですが、息子と一緒にボランティアで演奏させていただいています。子どもと共有できるものがあるといいですよ。



猪股さんと長男の潮くん

男性が育休を取得しやすくするためには必要なこと

猪股さん：仕事以外に、子育ても含めた様々な経験を経ることがキャリアを積むことだとすれば、男性も育休を取得しやすくなるのではないのでしょうか。育休中、確かに休職中ですが、むしろ、忙しいです。生活していくためにはお金に換算できない家事や育児は働くことと同じくらい大切だと思います。

齋藤さん：育休中は本当に忙しいです。休んでいるという感じではありません。私のように家庭の事情で取得せざるを得ない方も今後増えてくるかも知れません。金銭面での不安が一番大きいと思うので、もう少し支援があれば、男性でも取得しやすくなるのではないのでしょうか。また、職場や同僚がサポートしてくれる環境が大切だと思います。

加藤：「育児休業」という名称がもっと前向きでキャリアアップという意味合いも含んだものになれば、普及しやすいのかもしれないですね。平成29年の1月に育児介護休業法が改正されました。事業主に対する罰則規定はありませんが、労働者はより柔軟に制度を利用できるようになりました。

育休を取得することのメリットを知っていただくことで、さらに、広がって欲しいと思います。

※今回、取材に御協力いただいた齋藤さんが勤務する福島キヤノン株式会社は、ワーク・ライフ・バランスに総合的に最も取組が進んでいる企業として平成28年度福島県ワーク・ライフ・バランス大賞を受賞されました。これまで男性の育児休業取得実績があり、最長取得日数が89日と長く、女性も育児休業を100%取得しており、勤続年数に応じて特別休暇を付与するリフレッシュ休暇を定めています。

また、休業した社員への育児休業支援プログラムとして、e-ラーニングや復帰に役立つ情報提供等を行っており、総合的に優れた取組をされています。

福島大学4年生の渡辺里珠(さとみ)さんに座談会に参加した感想を寄せていただきました。

「イクメン」という言葉が広まっているにもかかわらず、男性の育休取得率が2.65%にとどまっている現状で、男性で育休を取得した経験がある方からお話を聞けるのはとても貴重な時間でした。私はお話を聞くまで、男性が育児休暇を取ることは、本人も職場もメリットがないから、取得したい人も少なく、職場も積極的に取得させようとしていないのではと考えていました。しかし、職場が育休取得を提案するなど協力的な職場もあることを知りました。

お話の中で印象的だったのは、育休を「休業」ではなく「キャリア」と捉えるというお話でした。「キャリア」と捉えることができれば取得率は上昇しそうだと思いました。社会にもっとこのような考え方が広まり、女性も男性も、育児も仕事も両立できるようになって欲しいと思いました。

今回の座談会には御参加いただけませんでした。福島市で中学校の社会科教員をなさっている武田秀司さんにもインタビューさせていただきました。

■育休を取得した理由は何ですか。

平成23年5月に長男が生まれ、小学校教員の妻が約2年間育休取得後の平成25年4月から1年間、長男が1歳10か月～2歳10か月の間育休を取得しました。育休を3年取得した方がよいと思っていましたが、妻は2年で職場復帰したいということで、私は当時、クラス担任や部活動の顧問をしていませんでしたので、校長先生に相談しました。

夫婦で教員なので、妻が長期間教育現場から離れる不安は理解できましたし、中学校の社会科を担当しており、授業の中で男女共同参画やダイバーシティ、社会参画について話す機会がありますが、自分自身に置き換えた時に、家事や育児への参画や地域との関わりが少ないことに気づき、育休を取得したいと思いました。

■育休中どのように過ごしていましたか。

育休に入って3か月は何もわからず不安でした。子どもは病気になるし、作った食事は食べてくれないし、最初の2週間は妻が仕事に行く度に泣かれ、私は3kgも痩せ、初めて手荒れを経験しました。今まで家事の3割はやっていたと思っていましたが、本当は1割もやっていたと気づき、妻の大変さを知りました。

4か月目頃からは慣れてきて、サンドパークなどに出かけ、子育て中のお母さんによく話しかけました。初めての子育ては不安でしたが、たくさんの方と話しているうちに、女性だった初めての子育ては悩みや不安を抱えていると知って安心しました。

震災直後、新潟県に避難した子どもたちの支援のため派遣されていた関係で、自主避難者の支援をしている方と知り合



武田秀司さんの育休中の一枚

いました。その方が所属する団体が県内に戻ってきたお母さんたちを対象に「ママカフェ」を開催すると知り、何かお手伝いしたいと申し出ました。「ママカフェ」とは震災により他県に避難して福島に戻ってきた方たちが安心して話せる居場所を提供することを目的としていました。私は教員という立場で、相談を受けるというより話し相手として参加させていただきました。その際に、お父さんだつて安心して思いを話せる場所が必要だと思い、F-ババプロジェクトを仲間たちと立ち上げ、「ばばカフェ」を中心に活動を始めました。その他家族で参加できるバーベキューや芋煮会、去年はNPO法人ファザーリングジャパンの安藤哲也さんを招いて講演会を開催しました。

育休を取得したおかげで、子どもと一緒に過ごす時間だけではなく、F-ババプロジェクトの活動を始めることができました。

育休のメリット・デメリットはどんなことですか。

メリットは、子どもに対する愛情がより深まったことです。子どもが喜ぶことやどんなふうにするかいいとか悪いとか、自然とわかるようになりました。子育てはかけた時間じゃないといいますが、たくさん時間を共有することは大切だと実感しました。

デメリットと言っているかわかりませんが、育休を1年間取得したので、職場復帰が大変でした。復帰した最初の3か月は自分でも驚くほど大きな声は出なくなっていて、仕事のミスが多かったと思います。仕事内容は変わっていないのに、育休前のリズムに戻るまで1年かかりました。もしかしたら、女性より男性の方が復帰後のサポートは必要なのではないかと思いました。

メリットもデメリットもありますが、育休を取得しなくてもできない経験がたくさんあります。育休取得を迷っている人がいたら、是非、取得して欲しいと思います。

座談会やインタビューを受けてくださった3人の方に共通していたことは、有意義な経験だったということ、育休を取得したことで妻が担ってきた家事や育児の大変さを知ったこと、子どもへの愛情が深まったこと、それは育休後もずっと続き良い関係を保っているということなどでした。育休を希望する男性が、今よりもっと取得しやすい環境になることを期待したいと思います。

図書室のおすすめ本

「きみといつまでも泣き虫おとうちゃんの子育て500日」

【分類 3206/ア】 あおむろ ひろゆき / 著
宝島社 2015年



子育てをする中での小さな笑い、驚き、発見は、子どもが大きくなっていくにつれて忘れてしまうものかもしれません。子どもの成長に感動しては泣き、成長を想像しては泣く「泣き虫おとうちゃん」が、日々の出来事を丁寧に拾い集めました。子育てと向き合うお父さんお母さんの息抜きになること間違いなしのエッセイマンガです。

「ルボ父親たちの葛藤 仕事と家庭の両立は夢なのか」

【分類 3206/オ】 おおた としまさ / 著
PHP 研究所 2016年



育児に家事に仕事に……イクメンブームに沸く今、ひとりブラック企業化する父親たちが増加しています。「より短い時間で今まで通りかそれ以上の成果を上げなさい」なんていう働き方はとても難しいこと。育休にまつわる夫・妻・会社の本音に触れ、男らしさに縛られず「かつこつけない、がまんしない」心得を学びましょう。

問い合わせ 福島県男女共生センター図書室 電話:0243-23-8308

ふくしま女性活躍応援事業

～けんせつ・どぼく女子のいま、未来～

平成28年11月26日に福島県建設業協会との共同主催により「ふくしま女性活躍応援事業～けんせつ・どぼく女子のいま、未来～」を開催しました。

超少子高齢化・人口減少社会において、社会の活力を維持するためには、女性があらゆる分野で活躍できるようにすることが必要です。

そこで、建設・土木業界における女性活躍推進について考える講演会と座談会を開催しました。

■ 第一部 講演会 13:30～14:30

「けんせつ・どぼく女子」が輝く未来のために



講師 麗 幸子さん

(日経BP社執行役員、元日経ウーマン編集長)

内容

「女性活躍推進法」による女性の採用・昇進や「えるほし」「くるみん」認定など、国が力を入れている取組の紹介や、人口減少社会における人材確保には女性の採用が欠かせないこと、女性が働きやすい会社は男性も働きやすく、そのような「ホワイト企業」を目指すべきで、中小企業こそ、女性活躍を切り口とした経営・働き方革新が必要とお話いただきました。

■ 第二部 座談会 14:40～15:40 ※女子学生のみ対象

「ふくしま」けんせつ・どぼく女子」座談会



講師 時弘 みどりさん

(一社)土木技術者女性の会 副会長、清水建設)

内容

①基調講話

時弘さんが関わってこられたお仕事や、女性が建築・土木の現場で働く環境づくりのために取り組む「土木技術者女性の会」の活動などについてお話しいただきました。

②グループワーク

県内外において、建設・土木業で活躍している女性の先輩方をお迎えし、参加者(学生)の皆さんと、働く上での様々な疑問点などについて話し合いました。

参加者の皆さんの声

【第一部】

◆ 建設業界で女性が働くことの意義について理解が深まった。本県の土木系学科に在籍する高卒女子のうち、建設業界に就職しない人が約8割いることは、業界として大きな損失であり、解決策を積極的に考える必要がある。

◆ 「働く女性自身が子育てに対する意識改革を要することが最後の壁である」との言葉が、いまの自分が抱えている課題を言い当てていただいている気がしました。

◆ 「女性が働きやすい職場は、男性も働きやすい」など、女性が活躍できる職場はいい会社であることが分かりました。

【第二部】

◆ 分かりやすく適切なアドバイスをたくさん聞くことができたので、将来安心して働くことができると思う。

◆ 女性の方でも土木関係の仕事に就くことができると分かり、とても安心しました。

◆ 貴重な話を聞けて、将来の参考になりました。とても楽しかったです。ありがとうございました。

ふくしまWLBフォーラム

平成28年12月1日に「ふくしまWLB(ワーク・ライフ・バランス)フォーラム」を実施しました。NPO法人ファザリング・ジャパン理事であり、NPO法人コチカラ・ニッポン代表の川島高之さんを講師にお招きし、「イクボス」をテーマにしたワーク・ライフ・バランス実践の秘訣についてご講演いただきました。

「イクボス」とは、「育児に理解がある」だけでなく、部下の私生活とキャリアを応援し、自らも私生活を満喫しながら組

織の成果達成に強い責任感を持つなどの考え方・行動をとる上司のことで、イクボス式経営をすることにより、従来の働き方を改革し、組織の業績アップが可能になるのです。元祖イクボスとしての取組を実践し、成果を出してきた川島さんの「イクボス十カ条」をご紹介します。あなた、またはあなたの上司はこの十カ条にどのくらい当てはまりますか？

イクボス十カ条

- ① 理解—部下の「大切にしている私生活」と「将来のキャリア」を理解し応援する。
- ② 多様性—働く場所や時間に制約のある部下を差別せず、多様な働き方を受容する。
- ③ 知識—育児などの社内制度や労基法などの法律を、必要最小限でいいのを知っている。
- ④ 浸透—私生活充実の大切さと権利主張の前に、職責を果たそうという意識を全体に浸透させる。
- ⑤ 配慮—転勤や単身赴任など部下の私生活に大きく影響を及ぼす人事について、最大限の配慮をする。
- ⑥ チーム—休暇や時短者が出て組織の成果を出し続けるために、チームワーク醸成に注力する。
- ⑦ 時間捻出—会議・書類・メールの削減、やらない事を決める、迅速な意思決定などで時間を捻出する。
- ⑧ 育成—「部下をコントロール」するのではなく、「一人一人への丁寧な指導と声掛け」で部下を育成する。
- ⑨ 自ら実践—ボス自ら、仕事×私生活×社会活動など、ハイブリッドな生活を満喫している。
- ⑩ 業績責任—組織の長として、職責にコミットし、計画や目標達成に強くこだわっている。

当センター1階の福祉機器展示室は、福祉用具・ユニバーサルデザイングッズを「見て、触れて、体験する」ことができます。今回は、展示している福祉用具から2つ紹介します。



簡単に使えるお箸「箸ぞうくん」他

持てば自然と手の中にフィットするグリップで箸を安定させ、指を動かすだけ。箸先を合わせる難しさやはさむ大きな力は不要です。箸先もつまみやすく工夫されていて、病気、マヒ、ケガなどで手指が思うように動かない方におすすめです。



足こぎ3輪車いす「イーストライダー」

3輪車のようにペダルをこいでハンドルを操作すれば、自由に移動できます。介助者が後ろから押す場合も、ペダルに乗せた足が動き筋肉や関節のリハビリになります。ハンドル、ペダル部をはずせば通常の車いすともなり、杖で歩くのは困難だけれど足はまだ動かせるという方などにおすすめです。

問い合わせ

福島県男女共生センター福祉機器展示室 電話：0243-23-8316

福祉機器を
展示しています！

福島の きらめく人

福島大学は平成25年度から文部科学省の「地(知)の拠点整備事業※1」に採択され、地域の未来を創造できる人材の輩出と原子力災害からの地域再生を目指す「ふくしま未来学」を新設し、多くの学生が学んでいます。

大学での仕事を通して福島の復興に力を注いでいる福島大学の北村育美さんにお話を伺いました。

■ 北村さんは大学でどんなお仕事をなさっていますか。

「地(知)の拠点整備事業」は大学が地域貢献するために設けられたもので、本学では「ふくしま未来学」として教育・研究・社会貢献という3つの柱で構成されており、福島県及び双葉8町村を始めとする11の市町村(以下:連携自治体)と連携しながら事業を進めています。

私の仕事は大学と地域をつなぐ地域コーディネーターです。その一つが、「むらの大学」という地域実践学習において、川内村で実施しているフィールドワークの地域との調整です。「むらの大学」は、学生が地域に入り地域が抱える課題解決のための取組から実践的に学ぶ授業です。学生を受け入れてくださる地域の方と信頼関係を築き、学生と住民と一緒に地域の課題を通して学べる環境を整えたいと思っています。その他、月に1回程度連携自治体を訪問する「みらいバス」を実施しています。本学の教職員や学生が対象で「福島を知る」をテーマに、地域との交流を目的にボランティア活動等も行っています。

■ お仕事をなさっていて、どんなことにやりがいを感じますか。

学生たちが地域の皆さんと一緒に学び、成長する姿を見ることがやりがいです。「むらの大学」や「みらいバス」は、まず地域の人たちと信頼関係を築くことから始まり、そこにおもしろさや難しさがあると感じています。「ふくしま未来学」は学類の枠を超えて履修できるため、地域に入って学びたいという学生はたくさんいて、4月に受講調整をしている程です。学生には実際に地域に入って、被災地の現状を見聞きすることで福島のことを自分の言葉で語れるようになって欲しいと思っています。



北村 育美さん



活動の様子

■ 今後、取り組んでみたいことはありますか。

学生が地域に入ることで、地域の方々に学生を受け入れて楽しかった、そして、この地域に住んでいてよかったと思ってもらえるような活動を学生たちと一緒に創っていきたくと思っています。

私は震災後、「ビッグバレットふくしま」に設置された避難所の支援に入ったことがきっかけで、福島に移住し復興支援の仕事をしてきました。ビッグバレットに関わった富岡町や川内村の方々が、お一人お一人の納得した決断ができるまで、関わり続けたいと思っています。

また、福島に来る前から復興や防災に関わる仕事をしてきましたので、防災リーダーを養成する講座の講師をさせていただく機会もあります。ですが、震災から6年が経過し、そういった講座も減り、防災意識は低下していると考えられます。一人一人が他者のいのちを守ることができる存在であると思っているので、避難所運営シミュレーション「HUG(ハグ)※2や「さすけなふる」※3などを活用し、私から働きかけ、お話できる機会を積極的に増やしていきたいです。

※1 大学が自治体と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・地域貢献を進め、課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在として大学の機能強化を図ることを目的とする事業。

※2 避難所運営する上で起こりうる出来事にどう対応していくかを模擬体験できるシミュレーションゲーム。静岡県が開発した。

※3 東日本大震災時、福島県内の避難所で実際に起こった事例を基に、避難所において被災者の幸せを最優先とした柔軟な対応の視点を身につけることを目的とした意思決定シミュレーションゲーム。

福島県男女共生センター広報誌

未来館 NEWS

2017
vol. 62

※当センターに対する御意見・御質問等がありましたら、下記までお問い合わせください。

(公財)福島県青少年育成・男女共生推進機構 福島県男女共生センター(女と男の未来館)

〒964-0904 福島県二本松市郭内一丁目196-1

TEL (0243)23-8301 代 FAX (0243)23-8314

ホームページアドレス: <http://www.f-miraikan.or.jp>

メールアドレス: mirai@f-miraikan.or.jp